

27 当施設における人工呼吸器再装着症例の検討

帝京大学附属病院救命救急センター

西田伸一，多治見公高 葛西 猛，小林国男

【はじめに】現在ある多くの三次救急施設においてそうであるように，当施設も限られた看護労働力と8床のICUベッド数のなかで，都の三次救急患者の要請にこたえている。こういったシステム上，救命処置を終えた患者に対し，時として十分なケアが行えない場合がある。そこで今回我々は反省材料として過去約10カ月間の呼吸管理症例をふりかえり，いったんは人工呼吸器を離脱したものの再装着を余儀なくされた症例について，いくつかの問題点を得たので症例提示を含めて報告する。

【対象】1989年8月1日より1990年5月20日までの10カ月間の当センター入院患者総数は525例であった。このうち人工呼吸器装着症例は182例であった。更に何等かの理由で人工呼吸器の再装着を行った症例は12例であった。再装着12例の延べ再装着回数は20回であった。性差は男性6例，女性6例で年齢32歳から82歳で平均年齢49歳であった。入院時診断は外傷5例，疾病7例で，APACHEⅡスコアは2から21点で平均11.7点であった。予後に関しては生存7例，死亡5例であった。

【結果】人工呼吸器再装着の理由としては，20回の再装着延べ回数でみると，手術後の呼吸管理を要したものの2回，無気肺，肺水腫，肺炎による酸素化能の障害がそれぞれ3，1，4回，中枢神経障害による呼吸停止が2回，また，それ以外の原因で呼吸苦や創部痛を訴えた症例に対して8回再装着を行った。これら再装着を行った背景には，意識障害が14回に，骨盤骨折による後腹膜血腫や肝破裂等による多量の腹腔内出血が6回に，不適切な鎮静剤投与による影響が4回にみられた。呼吸器装着期間は一回の装着で離脱できた85例では1から77日，平均4.9日，再装着症例では2から34日，平均17.4日であった。これら再装着例のはじめの装着期間は1から18日，平均6.7日，2回目以降の装着期間は1から31日，平均10.8日であった。次に非再装着例と再装着

例の離脱直後のPaO₂を比較してみた。非再装着例では136.9±39.9mmHg，再装着例では95.8±34mmHgであり，両者には有意な差があった。同様に離脱直後のPaCO₂を比較した。非再装着例では36.6±6.2mmHg，再装着例では42.4±10.6mmHgであったが，有意差はなかった。

【症例】次に，早期に呼吸器から離脱したことが引金となって肺炎を併発し呼吸管理に難渋した症例を提示する。症例は34歳，女性。交通外傷にて近医に搬送されたが，診断がつかないまま約5時間経過観察し，ショック状態となってから当センターに搬入された。搬入時，意識は盲ろう状態，血圧は触知不能であった。肝破裂，多発肋骨骨折，腰椎横突起骨折と診断され，緊急開腹術が施行され，肝右葉切除術が行われた。術後，更に腹腔内出血が持続したため，翌日再開腹にて止血術を行った。術後人工換気を行ったが，3日めにICUのベッドコントロール目的もあって呼吸器から離脱した。離脱時，意識は清明であったが，腹部膨満が認められた。離脱後，喀痰排泄困難があり，右上葉，左下葉の無気肺と右胸水貯留を合併し，これがきっかけとなってMRSA肺炎を合併した。本症例は結果的に人工呼吸管理を延べ33日間要し，第45病日に完全に離脱することができ，約4カ月後に退院となったが，再手術翌日の離脱をもう少し慎重に行っていれば，これらの肺合併症は防ぐことができたのではないだろうかと考えている。

【まとめ】以上より，再装着例の多くは，はじめの離脱時に換気障害や酸素化障害が残されており，ベッドコントロールを目的とした早期の離脱が結果的にはベッドの回転を悪くさせる誘因となっている場合もあるということが理解された。